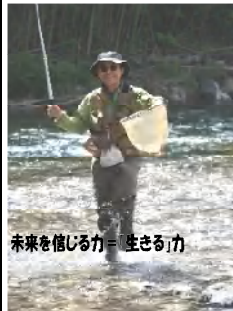


平成28年度 第3回講演会 記録

日 時	平成28年5月14日(土) 13:00~16:00
会 場	此花会館 梅香殿
講 師	高知県友釣り連盟顧問 「仁淀川リバーキーパー代表世話人」 松浦秀俊 先生
演 題	アユの復活を願い 川漁師に生きる
備 考	参加者数 176名(会員161名、非会員14名、聴講1名) 記録 樋野 巧



松浦先生は、長年の夢である川漁師として生きることを実現され、現在の自らを奥様との「偏利共生」と自己紹介された。川漁師の実体験と松浦ワールドを語る中で、アユ資源の激減原因は、「森川海のつながりが断たれ、自然の循環系や免疫系が機能しなくなったうえに、人と自然のつながりも断たれた」と断じ、個別専門的な技術での対応では限界があるとされた。そこに「これまでの学問の世界を超えて、地域に生きる人々との連携を重視し、つながりやめぐりなど見えない物の価値を大切にする(価値観再生)に貢献する学問」森里海連環学が必要、と看破された。アユやヤマメ、釣りへの想い、自然への強い思いなどを、楽しく饒舌に語るとともに、先人の言葉を借りて、松浦ワールドの自然観、日本人の自然観をお話しされた。特に印象深い話題・部分を断片的ですが、記述します。



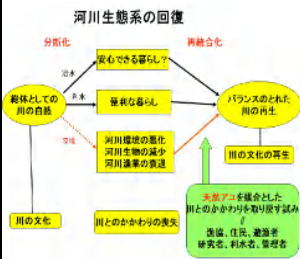
アユとは、苔を食うワカサギである。アユの生活史では、今、川を遡上し、夏は縄張りで苔を食う。秋には河口付近で産卵し、稚魚は海で過ごす。アユの恰好は、ワカサギやシシャモの類であり、後者は産卵時のみ遡上するが、アユは少し早く遡上し苔を食う。アユは、朝鮮半島・ベトナム・台湾に分布し、それらの生息地域の共通点は、川の流れが短い、澄み切った水、川に苔が生える大きな石があることである。アユは雑食の鯉系とは違い、苔の生える川に、他より少し早く遡上し、苔が食えるように身体を進化させてきた。最近のDNAの研究では、アユは幼形進化型魚シラウオの仲間、約一千万年前に分化したらしい。



ランドサットの写真を見れば、土佐湾に流れ込む川がいくつかあり、川の水が海水に影響していることが良く判る。これにより、貧栄養の黒潮が流れる土佐湾に、カツオやマグロが少しでも留まることになる。



RIVER KEEPER の試み：釣り人として、漁業者の立場に立って、どうやれば一緒にやっていたいのか、その試みとして、平成17年にリバーキーパー(RK)の組織を立ち上げた。RKは春先のアユの遡上調査やボランティアの学生や研究機関との調査結果を漁協に提供しており、漁協はその年のアユの生育状況把握や有効な対策の立案に役立てている。さらに、アマゴの放流や若者向けの釣り場づくり、秋にはアユの産卵場の床づくりも行っている。



河川生態系の回復：川の自然は、治水・利水をメインとして「環境」ほとんど忘れられてきた。平成10年の河川法改正時に「環境は」という言葉が入ったが、取って付けたような状態である。天然アユを媒介として川とのかかわりを取り戻す試みにより、バランスのとれた川の再生を行うべきである。

牧野富太郎の碑文より：人の一生で自然に親しむということ程有益なことはありません。人間はもともと自然の一部なのですから、自然に溶け込んでこそ、初めて生きている喜びを感じることができるのだと思います。自然に親しむため、まず己を捨て、自然の中に飛び込んでいくことです。そして、私たちの目に映じ、耳に聞こえ、はだに感じるものをすなおに観察し、そこから多くのものを学び取ることです。

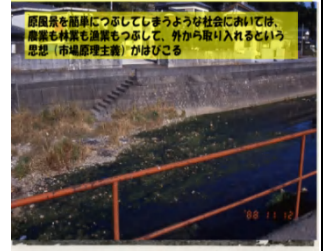
（まるでシニア自然大学校の精神を表しているような言葉です：樋野）

秩序と不秩序が見事に交錯した時、人はそこに自然の美しさを感じる ——生態学者エルトン



寺田寅彦の言葉（松浦先生が、尊敬されている郷土の物理学者・自然科学者）

日本人の自然観——日本人は、自然の恩恵を甘受すると同時に自然に対する反逆を断念し、自然に順応するための知識を蓄積してきた。自然と一体となり、自然を上手く利用しながら、自然を守ってきた。日本人の日常の自然との交渉は、科学的に見ても合理的であった。その合理性を発見し、証明する役目が将来の科学者に残された仕事であり、その合理性を制度や社会の仕組みにうまく組み入れることが行政(官僚)の仕事である。……
松浦：行政がそれを怠ってきたため、日本の一次産業は悉くダメになっている。科学者も官僚もその合理性を体でわかっている漁業者や農業者の声に謙虚に耳を傾ける必要がある。



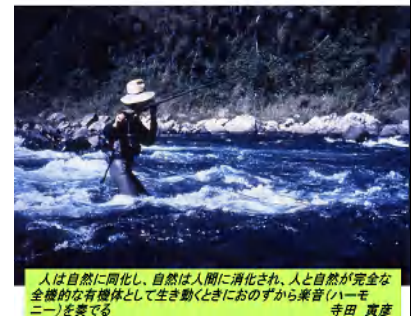
あらゆる災難は人為的なものである——「天災と国防」文明が進むほど天然の暴威による災害がその激烈の度を増す。科学的国防の常備軍が必要である。国際的非常時は、無形な実証のないもの、天変地異の非常時は最も具象的な眼前の事実である。

有機的統一体は、一部の故障でも全体に影響が及ぶ。

技術は進歩したのに、それを使う人間の知恵は退歩した。経験の記憶が弱い学問が足りない。本質的な部分の問題の解明を行い、それを次に活かすということが成されていない。

（災難をなくすればなくすほど、人間の頭の働きは鈍い方に移っていく）

すなわち、「天災は忘れたころにやってくる」（寺田寅彦の言葉）



もしも日本の自然の特異性を深く認識したうえで、この利器を適当に利用することを学び、天恵を有利に享有すると同時に、災禍を軽減しようと努力すれば、世界中で我が国ほど都合よくできている国はまれである。天恵の享樂のみに夢中になり天災の回避を忘れている。自然も変わり人間も昔の人間と違ったものになったとすると、日本人の自然観もそれに相応して何らかの変化をきたす。この新しい日本人が新しい自然に順応するまでには、これから先相当に長い年月の修練を必要とする。そして、多くの失敗と過誤の苦い経験を重ねなければなるまい。そうはいうものの、日本人はやはり日本人であり、日本の自然はほとんど昔のままの日本の自然である。日本のあらゆる特異性を認識して、それを生かしつつ周囲の環境に適応させることは日本人の使命であり存在理由であり、また世界人類の健全な進歩への寄与である。——日本人が世界に貢献できる。

寺田寅彦の言葉は、第一次と二次世界大戦の間、昭和7、8年頃のきな臭い時代に発せられた言葉らしい。そんな時代に、このようなことを指摘できる科学者がいたなんて、大変な驚きです。現在の危機的な自然・環境、それは、地球温暖化であり、大震災であり、原発事故であると思う。それを言い当て、痛烈な文明批判であり、自然への謙虚さを求める強烈な言葉だと思う。そして、批判するだけに留まらず、私達日本人が進むべき方向をも示している。この偉大な先人、寺田寅彦の著書を読みたくまりました。

それにしても、松浦先生の退職後の生き方、`何だか`一本筋が通っていて清々しく、何だか微笑ましく羨ましく思えました。ご活躍をお祈りしております。

以上